

学会抄録 (分科会)

第14回東邦大学医療センター佐倉病院内科学講座例会 および第11回東邦医学会佐倉内科分科会

2018年12月9日(日) 10時~17時40分
ホテルニューオータニ幕張(2階 ステラ)

開会の挨拶 龍野一郎

第I部 学内研究発表

座長 清水直美, 高田伸夫

A グループ

特発性間質性肺炎に対する自己免疫の関与の検討

早川 翔

特発性間質性肺炎(IIPs)の中には、自己免疫的要素を伴い、その他のIIPsと異なる臨床経過を認める1群が存在する。当院通院中の240例のIIPsに対し、ユーロラインを用いて自己抗体20種を測定し、自己抗体と臨床経過・予後の関係につき検討する。

B グループ

Atorvastatinによる脂肪酸代謝酵素 Fads 1, Fads 2, Elovl 5 遺伝子発現の増強とその作用機構

田中 翔

スタチンは ω -3脂肪酸を低下させ、その心血管残余リスクに関与している可能性が報告されている。我々は3T3-L1細胞とHepG2細胞において、Atorvastatin(ATR)が脂肪酸代謝酵素のmRNA及び蛋白発現に与える影響を解析したため報告する。

C グループ

Riociguatの循環動態および血管弾性に対する影響

佐藤修司

Riociguatは選択的肺血管拡張薬であり、慢性血栓塞栓性肺高血圧症(Chronic thromboembolic pulmonary hypertension: CTEPH)に対する有効性が確認されている。既知の循環動態指標と血管弾性指標 Cardio-ankle vascular index(CAVI)を用いて、Riociguatの循環動態および血管弾性に対する影響を考察した。

D グループ

生物学的製剤ゴリムマブと潰瘍性大腸炎

岩佐亮太, 山田哲弘

現在の炎症性腸疾患診療では多くの新規薬剤が登場し、選択肢が多岐にわたる。また外来治療の役割が大きくなってきており、その一端を担う皮下注射ヒト型抗TNF α モノクローナル抗体製剤ゴリムマブにつき検討した。

E グループ

脊髄小脳変性症における前頭葉機能障害と運動障害の関連について

館野冬樹

脊髄小脳変性症における高次機能障害と運動障害の関連を検討した。脊髄小脳変性症と診断された20名に対し高次機能検査ならびに運動機能評価（SARA・5m歩行）を行なった。前頭葉機能障害と運動機能障害が相関することが明らかになった。

血液内科

感染症とは独立して血中プレセプシンレベルに影響を及ぼす病態の探索

山口 崇

我々は感染症所見なく血中プレセプシン（P-SEP）2000 pg/mL以上が持続したTAFRO症候群を経験した。P-SEPへ影響を及ぼす因子を探索するため、2017-2018年の間にP-SEPが測定された611例において多変量解析を行った。その結果、胆道系酵素が感染症や腎機能とは独立してP-SEPに影響を及ぼすことが明らかとなった。

腎臓内科

GFR変化率シートの開発と療養指導外来によるCKD重症化予防の効果

山崎恵介

GFRの変化を可視化するためにGFR変化率シートを開発し、男性20名、女性11名に対し多職種によるCKD療養指導を行った。介入前後3か月を比較すると、血圧およびLDL-Cは低下し、蛋白尿の減少はないもののGFR変化率は低下が緩やかになる傾向を認めた。

第II部 前期1年目研修医発表

座長 野呂真人, 高田伸夫

1. AQP4陽性視神経炎後、経過観察中に視神経脊髄炎を発症した一例

佐々木聡子

指導医名：相羽陽介（Eグループ）

24歳女性、視神経炎後の経過観察中、突然の皮膚感覚異常で来院した。視神経脊髄炎の診断となり、ステロイドパルスを行い症状改善した。視神経炎後の脊髄炎への移行および加療について文献的考察を交えて報告する。

2. SIADHを合併したデング熱の一例

水野谷郁子

指導医名：中村祥子（Bグループ）

73歳男性、発熱・全身倦怠感にて来院。全身性発疹・血小板減少・低Na血症を認めた。海外渡航歴より輸入感染症が疑われ、迅速キットにてデング熱と診断。SIADH合併例の既報はなく、若干の文献的考察を加えて報告する。

3. コントロール不良な気管支喘息に対して吸入療法の工夫でアプローチした一例

坂口吉朗

指導医名：入江珠子（Aグループ）

難治性喘息の56歳女性。吸入療法の理解・遂行が不良であり、入院指導による治療の徹底で改善に至った。難治性喘息に吸入デバイス変更を含めた治療の工夫が有用な場合があり、文献的考察を交えて報告する。

4. ステロイドパルス、IVIg療法により軽快したCIDPの一例

池田拓史

指導医名：館野冬樹（Eグループ）

71歳女性。慢性進行性四肢運動感覚障害を主訴に来院した。臨床所見、電気生理学的検査、画像検査よりCIDPの診断

に至った。急性期治療として、ステロイドパルス療法、IVIgを施行した。本例における診断と治療選択に至る過程に焦点を当て、文献的考察を交えて報告する。

5. バソプレシン投与により安全にNa補正を行うことができた低張性脱水の一例

滝井寛隆

指導医名：田中 翔 (Bグループ)

51歳男性。意識障害をきたし救急外来受診。低張性脱水による低Na血症で入院となった。細胞外液補充を行ったが、多尿と急激なNa上昇を認めたためバソプレシンを用いて安全に治療し得た一例を経験したので報告する。

6. 原発不明な巨大腹腔内腫瘤に対し病理診断にて神経内分泌癌疑いと診断された一例

梅田 涼

指導医名：古川潔人 (Dグループ)

51歳女性。腹部膨満を主訴に近医を受診し、精査目的で当院紹介受診。CTで肝右葉付近に13 cm×15 cmの腫瘤を認め、病理にて神経内分泌癌疑いと診断された。当疾患は稀少癌であり文献的考察も踏まえて報告する。

7. 心房粗動を契機に増悪したうっ血性心不全の一例

入江祐介

指導医名：相川博音 (Cグループ)

54歳男性。陰嚢水腫を主訴に受診。心房粗動によると考える頻脈誘発性心筋症と心不全を呈しており、利尿薬を中心とした加療と電氣的除細動により心不全が著明に改善した一例を経験したため報告する。

8. 汎血球減少と血液凝固異常を合併した一例

酒井大輝

指導医名：清水直美, 田中 翔 (Bグループ)

26歳女性。鼻出血、左下腿皮下出血、血尿を主訴に当院受診。採血で汎血球減少とビタミンK依存性凝固因子欠乏を認めた。骨髓、体細胞からRobertson転座が検出されたものの、診断に難渋した症例を報告する。

9. ステロイド合成酵素阻害薬による内服加療を行ったACTH依存性クッシング症候群の一例

高橋 禎

指導医名：渡邊康弘 (Bグループ)

86歳男性。慢性心不全の加療中に両側下腿浮腫と低K血症が出現し異所性ACTH依存性クッシング症候群とした。原発不明であったが副腎皮質ホルモン合成酵素阻害薬を投与し原疾患をコントロールでき考察を交えて報告する。

第 III 部 後期研修医発表

座長 松岡克善, 大橋 靖

1. 化膿性脊椎炎を合併した糖尿病患者の臨床的特徴

日高 舞

指導医名：山口 崇 (Bグループ)

化膿性脊椎炎は長期抗生剤治療を要する難治性感染症であり、糖尿病患者に合併しやすい。一方で、頻度や背景因子など臨床的特徴は十分明らかでなく、今回経験した1例提示に過去の当院例解析を加えて、文献考察を交えて報告する。

2. 常染色体優性多発嚢胞腎に小腸憩室出血を合併した1例

関 駿介

指導医名：佐々木大樹 (Dグループ)

65歳男性。透析中に血便があり、小腸内視鏡にて小腸憩室出血を認めた。常染色体優性多発嚢胞腎に大腸憩室を合併することはよく知られているが、小腸憩室の合併報告は限られている。今回経験した症例に文献的考察を踏まえて報告する。

3. 意識障害を伴う重篤なトルソー症候群より回復，独歩退院し得た ALK 融合遺伝子陽性肺腺癌の一例

内藤大輔

指導医名：松澤康雄（A グループ）

38 歳男性，ALK 陽性肺腺癌にて治療中，トルソー症候群による脳梗塞で入院。重篤な状態に陥ったが，強力な抗凝固療法，抗がん剤治療，リハビリにより独歩退院しえた。トルソー症候群の改善例は稀であり報告する。

4. 下肢静脈血栓症，肺塞栓症および心筋梗塞を短期間に発症した抗カルジオリピン抗体症候群と SLE の一例

磯西 淳

指導医名：佐野英樹（いすみ医療センター）

65 歳女性。2018/3 右下肢疼痛と浮腫が出現し当院受診，DVT と肺塞栓症を認め入院となった方。抗リン脂質抗体症候群と SLE の合併はしばしば認められるが，本症例では発症から短期間で静脈血栓症と冠動脈疾患を発症し，比較的稀な症例だったため報告する。

5. 透析を離脱しえたマラリア腎症の 1 例

石井信伍

指導医名：森山憲明（成田赤十字病院）

現在，マラリア腎症のエビデンスに基づく治療法は確立されていない。今回，マラリア腎症による急性腎不全に対し，重症マラリア治療薬であるキニーネ投与で透析を離脱しえた 1 例を経験したため報告する。

6. 慢性血栓塞栓性肺高血圧症に対し経皮的肺動脈形成術を施行した一例

恩田洋紀

指導医名：佐藤修司（C グループ）

65 歳男性。1 年以上前から労作時呼吸苦を自覚していた。心エコー上肺高血圧症が疑われ，肺血流シンチグラフィで多発性区域性陰影欠損を認めた。右心カテーテル検査と肺動脈造影から慢性血栓塞栓性肺高血圧症（CTEPH）の診断に至り，カテーテル治療を行った。CTEPH を疑い診断および治療にいたる過程に焦点をあてて報告する。

7. 糖尿病を合併した周期性嘔吐症の診断治療経過と内分泌学的評価

山岡周平

指導医名：山口 崇（B グループ）

成人周期性嘔吐症（ACVS）は，特徴的な内分泌機能異常を呈し，糖尿病の合併が多いと報告されているが，認知度が極めて低く病態基盤は明らかでない。今回，若年発症の糖尿病に ACVS を合併した症例の診断治療経過および内分泌学的評価について文献考察を交え報告する。

第 IV 部 今年度優秀論文賞（白井賞）

座長 榑原隆次，授与 白井厚治

7-Ketocholesterol induces ROS-mediated mRNA expression of cyclooxygenase-2 and pro-inflammatory cytokines in human Potential role in diabetic nephropathy

渡邊康弘

第 V 部 佐倉病院の目指すところ

座長 飯塚卓夫

佐倉内科講座のこの 1 年と来年への課題

龍野一郎

佐倉病院は 1991 年に開院し，四半世紀の歴史を刻んでおりますが，この 4 月に龍野が入江實教授，富岡玖夫教授，白井厚治教授，鈴木康夫教授に続く，第 5 代目の佐倉内科講座主任教授に就任させていただいております。佐倉は西の適塾と

並んで西洋医学の発祥の地の一つとされた蘭医学塾である佐倉順天堂が幕末に佐倉藩によって設置されたところで、この地で地域中核医療機関である大学病院として①地域に信頼される専門・先端診療の実践、②病気の解明と臨床研究の推進、③すぐれた臨床能力を持つ専門医の育成を使命として日々活動にあたっています。佐倉内科講座の特徴は総合内科医局として運営されており、この4月に赴任いただいた消化器内科の松岡克善教授をはじめ、5名の教授が所属していますが、これら専門診療科が一つの内科学講座として各診療科間の垣根を下げ、良好な診療・研究・教育環境を創っています。このような内科講座の運営は全国的にも極めて珍しいもので、総合診療能力のある内科専門医が多く巣立っています。このような実績から初期研修病院としては3年連続フルマッチし、新後期専門医の募集においても平成30年度に千葉県内第3位の実績を残しました。ただ、我々を取り巻く環境は厳しく、高齢化に伴う高機能病床の削減だけでなく、診療圏においては2年後に国際福祉医療大学附属病院が開院するなど厳しさを増してゆきます。この荒波を乗り越えるためには内科講座の総合力が基盤であることを肝に銘じ、今後とも皆様とともに切磋琢磨し、支えあっていくことが大変重要と感じています。

来年もどうぞよろしくお願いいたします。

A グループ (呼吸器・免疫・アレルギー)

松澤康雄

肺がんをはじめとする呼吸器疾患の診療が急速に進歩していく中、新たな入局者を得て、前後期研修医の力も借りて、1年、頑張ってきました。恵まれた環境に感謝し、来年は、一層、成果をあげるべく取り組む所存です。

B グループ (糖尿病・内分泌・代謝)

糖尿病内分泌代謝センターこの1年と来年への課題

龍野一郎

我々は大学病院に所属する臨床研究者として臨床医学への貢献が常に求められるわけで、佐倉内科講座例会は自分に厳しく問いかける良い機会となっています。

今年を振り返りますと、糖尿病内分泌代謝センターは臨床面では佐倉内科講座の一員として血液内科・腎臓内科の先生方とともに病棟運営にあたり、診療・教育・研究で大きな実績を上げてきました。重点的に頑張っている肥満外科治療の症例数は引き続き、全国の大学病院でNO1であり、7月からは本年先進医療に指定された腹腔鏡下スリーブ・バイパス術が全国で2番目の施設に認められました。2016年に開始した厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患政策研究事業)「食欲中枢異常による難治性高度肥満症の実態調査のための研究班(龍野班)」は調査のまとめを行い、その成果を6月に龍野が主宰した第36回日本肥満症治療学会学術集会で新たな難治性高度肥満症の診断基準として公表しています。これ以外にも糖尿病・内分泌・脂質代謝・血液の分野で多くの業績がでており、学術面ではこの10月までに7つの英文論文がpublishされ、4つの国際学会・会議、国内の主要12学会で多数の発表が行われました。今後とも、糖尿病内分泌代謝センターはそのミッションである●地域に信頼される専門・先端診療の実践、●疾患の分子病態解明とそれに根差す臨床研究の推進、●総合内科臨床能力を持つ専門医・臨床研究者の育成を常に心に留め、グループ一丸となって進んでいきたいと思っております。最後に日頃より我々のグループの活動に理解いただき、支えていただいている内科講座の先生方に感謝します。

C グループ (循環器)

野呂真人

循環器内科各人の専門性の追求と、その共有、融合を図り、結果として地域に於けるOpinion leaderを目指すところと致します。昨年来より、専門性の追求と共有を開始し、地域医療の中核を担う基盤形成が成される過程にあり、今後はこの方向性を推進する所存です。

D グループ (消化器)

松岡克善

消化器内科の臨床は忙しい。一方で佐倉病院は大学病院であり、研究・教育も重要な責務である。臨床・研究・教育の比重を個々の医師が考え、チームとして地域の中核病院そして大学病院としての責務を果たす消化器内科を目指す。

E グループ (脳神経内科)

E チーム脳神経内科～患者さんとともに

榊原隆次

E チームは、難病先進医療、脳卒中 SCU、認知症疾患医療センター/認知症 DST により患者さんとともに歩みながら、英口演 15 編/英論文 10 編/英著書 2 編で世界に向けて佐倉をアピールしています。頑張ります！

血液内科

清水直美

当院血液内科は本年血液研修施設の申請を行いました。症例報告に始まり、臨床研究、基礎研究も可能な環境にあります。日々の診療を丁寧にこなすことから新しい事実を突き止め、常に学ぶ姿勢を忘れずに成長し続ける医師を育成したいと思っています。当院では疾患の偏りがあることから、千葉大学関連病院での研修を考えています。

腎臓内科

大橋 靖

腎臓病は蛋白尿・浮腫あるいは腎機能障害に始まり、時に急性、時に慢性の経過を辿りながら、末期腎不全に至る疾患である。腎臓に特有の病気もあれば、生活習慣病のような Common Disease にも関連し、希少疾患にも関連する。腎不全は老廃物の蓄積、体液・電解質異常、酸塩基平衡異常、骨・ミネラル代謝異常を招き、その補完として透析療法と腎移植がある。講座のテーマは「腎臓病と健康」であり、その「ベストプラクティス」を探求する。

第 VI 部 特別講演

座長 龍野一郎

矢島鉄也先生 (千葉県病院事業管理者 (病院局長))

国の生活習慣病重症化予防対策と健康予防対策について

研修医発表表彰式

松澤康雄

閉会の挨拶 榊原隆次